

そこに 学校があった 休廃校の歴史

大奈路小学校 下道分校(上)



涙ぐましい苦労の歴史

大奈路小学校には分校があったことを記しておかねばならない。下道分校である。周辺地域同様、下道分校の歴史には、大正地区北部の「山また山」に生きる人々の「学校教育を受ける、受けさせるための涙ぐましい苦労」が詰まっている。

下道分校の前身は蔵正庵という寺、つまり寺子屋である。明治30年、芳川との巡回形式で授業を行なう下芳尋常小学校下道巡回教授場となる。その後、下芳尋常小学校が廃止され、大奈路尋常小学校下道分教場として、春日神社社地に校舎が建てられた。しかしそれから10年の間に村の財政が逼迫。廃止統合を余儀無くされる。これにより苦労を強いられたのは当時の子どもたちであった。

このことについては大正町史に詳しい。明治時代、村の山間には道路らしい道路はなく、谷川を渡るにも丸木橋が渡されている程度で、大人でも通行困難な「けもの道」がほとんどだったというから、6〜7歳くらいの子どもの何キロも歩いて通学するなど、危険極まりない状況だった。「学校に行かにはあならん。と言われ一度出席したことがあるが、途中の小橋を渡るのが恐ろしかったので、その後は一度も出席しなかった」という、下道の古老の話も残っていると記録されている。

「親心」「地域心」で戻ってきた学校

そんな状況であるから、さすがに大人たちも動く。一旦廃止になった下道分教場は、翌年に下道家庭教育場という名で認可請願書が出され、さらにその4年後にやっと再開されるに至る。大奈路尋常小学校下道分校として、下道の子どもたちが安心して通える学校が当地に戻ってきたのである！1917(大正6)年のことであった。

子を思う「親心」、子どもたちを思う「地域心」が生んだ学校と言って良い。下道で暮らす大人たちの、小さき命たちへの温かい眼差しと思いこそが、下道分校の復活を実現させ、さらにはその存在を支え続けた。

子どもたちのために！学校のために！ 地区のために！

時代は進み、人々の暮らしぶりも少しずつ変わっていったが、分校を支えてきた地域住民たちの「初心」は変わらない。1956(昭和31)年、ある教員が分校に赴任することになった時のことだ。地区住民たち十数人が、ダムに向こう岸を走る国道439号までその教員を迎えに行った。そこで荷物を受け取ると、それらを皆で担いで堰堤を歩き、下道側まで運んだ。そこから集落までは森林軌道を使った。そうして出迎えた教員に、住民たちは言ったそうだ。「先生、下道の住民になってよ！」そう言われた教員も「子どもたちのために！学校のために、地区のためにやっいてこう！」と決意したという。

さて、その頃の分校は現在の場所ではなく、春日神社から少し下った所にあった。そして、クラスは、1・2・3年生で1クラス。4・5・6年生で1クラスの計二組の複複式。敷地は運動場を確保するだけの余裕がなかったため、体育の時間や運動会などでは、子どもたちは校舎の周りを走った。それでも「学校が地区内にある」ことの意義は大きく、山里に聞こえる子どもたちの歓声は下道の人々の「分校愛」を深めていくのだった。(次回に続く)



現在の場所に移転する前
(昭和30年頃)



運動会の練習。運動場を十分に確保できないため、校舎の周りを走った。



1・2・3年生の授業風景
(昭和30年代)

町のうごき

(8月31日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	6,870	-21		男 3	18	11	17
女	7,415	-17		女 0	13	10	14
計	14,285	-38		計 3	31	21	31
世帯数	7,744	-19		(8月中の届出)			
窪川地域	10,224人			大正地域	1,960人	十和地域	2,101人